

図書館だより

埼玉県立図書館

18号



(写真提供 篠原忠義氏)

奥武蔵の山里を、気軽に散策するのは楽しい。天覧山を起点とする奥武蔵自然歩道は、高麗峠、巾着田、日和田山を経て、鎌北湖に至るハイキングコースだ。

巾着田から日和田山にかけてのこの一帯は、高麗郷と呼ばれ、遠く奈良時代に、高句麗からの帰化人が移り住んだところ。地名の由来もここにある。高麗川の清流がゆるやかになるこの地をせきとめて、水田を開いたといわれる『巾着田』、今は休耕田が多く、夏には雑草と尾花が生い茂る。

冬の巾着田は、日和田山にいだかれ、高麗の『ひなた』のようで暖かい。タンポポの種子を吹き、畔で風を揚げ、河原において石投げをした幼き頃を思い出す。

(岡部)

冬の日日

若い頃の思い出
小室英夫

朝晩の底冷えがひどくなった。冬が間近になった。

消し炭

学問のさびしさに堪へ炭をつぐ

山口誓子
明治・大正の頃、いわゆる書生であつた人々の共感を博した名句だと思ふが、今日の学生には理解できない遠いものとなつた。父母の膝下を離れ、下宿屋の暗い二階で火種を吹き、勉強に励んだ学生の心情が良く出ており、怠惰な私にとって縁遠い世界ではあるが、それでも多少似たような体験がある。進学準備の勉強を始めたのが丁度太平洋戦争の初期だつた。物資がそろそろ乏しくなり、暖をとるのにも燃料は炭ぐらいしかなく、その炭も大部分は風呂を沸かした後の消し炭なので、灰になり、火をもたせるのに大層苦労した。

寒夜、綿のいっぱい入った襦袢を着こみ、消し炭の忌み嫌つた動作である火鉢に足をかけ、時々消し炭を足しながら、麻の寝巻を着て寒さを凌いだ山上億良よりはまだマシだとかじかんた手でページをめくつたものだ。

徒然草

受験勉強は昔も大変で、知命の年を過ぎた人でも、入学試験に答案を書けず、時間に追われる夢魔にいだに襲われるという話があるくらいだ。しかも、当時は進学先が決まっていなくて徴用工となつて軍需工場に動員されるといふ噂があり、いわば背水の陣を布いた戦いだつた。三月の初め頃、さる有名私立大学予科の二次試験の面接の時だつた。あらかじめ提出した願書に愛読書の書名ととて文学書が周囲にあるわけでもないのに全く困りはてた。まさか当時の雑誌類に連載された菊池寛や川口松太郎の通俗小説を書くわけにいかない。ついに意を決して「徒然草」と書いた。面接は二人の先生だつたが、これには驚いたらしく「つれづれだそうですよ。出身中学は田舎ですな。」私の席から多少離れたところで打ち合わせをしている二人の小

声が聞こえる。私は赤面した。徒然草を通読すらしておらず、兼好についてほとんど何も知っていないのだからまさに冷汗三斗だつた。先生は私の様子をみて察知したようで、ごく簡単な質問で放免してくれた。

丁先輩

学問あるいは勉強という私の連想する語は読書、明窓浄机だが、いまだに脳裏を離れない光景がある。受験もどうやら事なく済んで、S市に遊学することができたが、学校生活に多少なじんできたある日、寮のすぐ近くの名利に下宿中の丁先輩を尋ねた。戦局は悪化しており、書物も街の書店にはなくなつていて、私たち一年生は先輩の蔵書を讀んでもらつたりして、読書の飢えをいやしてゐた。召集令状が舞い込み、間もなく軍隊に入る丁先輩が、不用になつた文庫本を取りに來い、というのでかけたわけだが、部屋の障子を明け放つてマントに身をくるみ、黙々と読書している先輩の姿に思わず息を呑んだ。初冬とはいえ、明るい朝の日射しの中で、書物を傍らに積んで他に何もないうまきに明窓浄机、出征前の貴重な自由の一時を凝然として読書に打ち込むその姿に私は感動した。丁先輩は戦陣に没して今は亡い。

烏兔勿勿

あれから四十年近い歳月が流れた。県立図書館に勤め読書普及活動に従事している昨今だが、戦前、戦中と現在を比べるとまことに今昔の感がある。先輩を尋ねて書物を探し求めることもなく、寒炭炭を起こし火種を吹く必要もなくなった。召集令状も来ないし、軍需工場への徴用もない。街の書店に書物が氾濫し、公共図書館もある程度書物を揃えて利用者を待つようになった。読書環境は充実してきたが、裏腹に読書に対する識者の危惧の声も高まつてきた。昔、電車内での学生のアクセサリーは岩波新書だつたが、漫画少年ジャンプに変わり、今は写真中心のフォークラスだそうである。「昔岩波令フォークラス」この言葉は一面の真相をついているかも知れない。だが次の事も事実である。私は毎日館内を午前、午後と一巡するが、閲覧席はほとんど満席だし、返却し、貸出しを受けている利用者はまことに多い。この事実に加えて、先日の移動図書館利用者集の集いでうら若い婦人の発表は、私に深い安堵感と励ましを与えてくれた。「読書は最高のぜいたくです。私達グループはこのぜいたくをずっと追い求めていきます。」と。

第五回「本を読む県民のつどい」

新進作家金井美恵子氏を迎え
盛會裡に終る
晴天に恵まれた十一月十六日(水)「県民の日」の記念事業、読書週間行事となつてゐる「本を読む県民のつどい」が、蔵市民会館において午後一時から開かれました。

会場には、県内各地の読書グループの方々、蔵市を中心とした子供づれの主婦の参加する姿が目立ちました。

担当館である桑野浦和図書館長のあいさつで開会し、県教育長代理高田社会教育課長、安藤蔵市教育長の主催者あいさつ、県知事代理持田浦和地方県民センター副所長、田中蔵市長の来賓祝辞があつて、別記の二十名の読書感想文入選者の表彰、優良読書グループ表彰の伝達が行われました。

つづいて、詩人の弓削緋紗子氏から審査員を代表して講評をいただき、入選者の毛呂山町鈴木澄子さんが自作の「小児病棟の子どもたち」とわたしの朗読があり、このあと、川口市にある青桐読書会代表の星野照子さんによる読書グループの事例発表が行われました。



記念講演は、作家金井美恵子氏で、演題は「読むこと終りなきたのしみ」――死の棘を読む――で、人生の中で自分の本を見つけ、その本につきあへることの大切さについて、静かな口調で語られ、参加者に感動を与えた。

読書感想文入選者 (敬称略)

- 小川栄 (春日部市) ・ 佐々木治子 (毛呂山町) ・ 古本洋子 (坂戸市) ・ 大橋喜美 (川口市) ・ 三村武夫 (狭山市) ・ 村田重雄 (大宮市) ・ 延原幸子 (岩槻市) ・ 鈴木澄子 (毛呂山町) ・ 坂田みつ江 (白岡町) ・ 小久保清子 (飯能市) ・ 小和瀬宣子 (川越市) ・ 奥山恵美子 (都幾川村) ・ 川崎基司 (大宮市) ・ 茅野辰水 (浦和市) ・ 木幡幹枝 (栗橋町) ・ 藤本新子 (浦和市) ・ 柏木黎子 (浦和市) ・ 工藤妙子 (杉戸町) ・ 浅見かおる (妻沼町) ・ 三上孝子 (荒川村) (受付順)

県内図書館めぐり

春日部市立図書館

緑に囲まれた、旧葉草園跡地(春日部駅東口より徒歩十三分)の広い敷地に、市民文化会館とともに、新しい図書館が完成し、昭和五十八年六月一日に開館いたしました。

この建物は、鉄筋コンクリート二階建、延べ床面積は、二、二〇〇㎡です。(一階は一、四八六㎡)

新しい図書館の特色は、館外貸出中心に設計されているため、市民が直接利用する施設は、すべて一階に配置してあります。床面はフラットになっており、書架と書架との間には十分間隔があるので、車椅子の方でも利用できます。また、貸出・返却業務はもとより、情報検索は日本語処理によるコンピュータ・システムを備え、武里分館とはオンラインでつながっております。したがって、武里分館でも本館の蔵書を検索することができま

〇一般図書開架コーナー

六万冊の一般図書が、色別に分類され配架されています。中庭に面した窓下には、読書するためのベンチが用意されています。

〇児童図書開架コーナー

低書架を中心に、二万冊の児童図書が配架されています。児童図書のほか紙芝居も備えています。



所在地 春日部市柏壁東2-18-1
電話 〇四八七(六一)五九一一

埼玉の文学 埼玉関係の俳諧資料考

▽ 3 ▽

今回は、県東部地方の越谷吾山を紹介したい。

吾山は姓を会田氏、名を秀真、号を吾山、俳号を古庵庵のちに師竹庵といい、出身地名を冠せて、越谷吾山と呼ばれる俳諧宗匠である。

享保二年（一七二七）に、越谷宿の会田家に生まれ、江戸に住むことが多かったが、天明七年（一七九七）の十二月十七日に七十一歳で没し、その諡号は、法橋往誓吾山師竹居士とする墓石が市内の天嶽寺にある。

埼玉図書館発行の埼玉名家著述目録のなかに、会田吾山の欄があるが

諸国方言	物類称呼	五冊	板本
雅言俗語	俳諧語	二冊	板本
俳諧	続翌檜	二冊	板本
俳諧	月と汐	一冊	合巻
俳諧	朱紫	四冊	板本
俳諧	本草	未刊	
俳諧	八集問答	二冊	
雅俗	本朝勝樂記	二冊	
	もとの水	一冊	板本

と記載されている。しかしこれら著書とされているものでも、未見のものが多くは事実である。

埼玉郷土資料について

物類称呼は、諸国の方言を集めた方言辞典として、埼玉の誇れる価値あるものである。安永四年（一七七五）板行の五冊が、県立浦図と越谷図にある。また浦図には昭和八年発行の校本物類称呼の活字本一冊があり、これらの研究に役立つものである。そのほか安永三年（一七七四）板本の「俳諧東海藻」が浦図に、安永八年（一七八九）の「翌檜」が越谷図にあるので、閲覧をおすすめしたい。

吾山句碑について

越谷市の名刹、天嶽寺には、吾山百五十年忌の句碑が建立されている。ひとつの光るや今朝の秋



一釣瓶の井戸水のひかりに、秋を感じるといふ、俳諧ならではの作品で、昔の庶民生活の情景を詠んだものである。同市内の久伊豆神社の池畔に、もう一基の句碑がある。



嘉永二年（一八五〇）正月十三日、地元の伊勢太々講連が、旅立ちを記念して、吾山の句を建てたものである。

吾山亭句会について

国会図書館蔵本の「越谷行脚」は、新編埼玉県史―資料編12に転載されているが、騎西の桑落庵主が、越谷の吾山亭を訪れ、八幡宮で月見の句会を催したときの記録である。庚申仲秋とは元文五年（一七四四）にあたり、吾山二十四歳のときの俳諧興行である。

名月やうつむく物は稲ばかり吾山初汐や松にかはかす鶴の足 吾山竹の露踏こぼしたり朝すめ戸涼などの作品が掲載されている。この桑落庵主人を私が調査したら、綾川観という姓名で、俳号を戸涼という人物である。綾川姓はめづらしく、都内と桶川・妻沼に同姓者が住んでいるが、どうも継がらないので、手がかりがあれば調べたいところである。

吾山の辞世句について
華と見し雪はきのふぞもとの水
風花の舞う風情は、華やかに見えるものである。その華と見し雪は、昨日のことで、今日はただの水になつてしまふことよ。人間も土に還るときは、もとの水にかえるようなもので、死に直面する悟りきった境地が詠まれている。

「もとの水」という句集は、天明七年（一七八七）の芭蕉の発句集にもあるが、吾山の「もとの水」は安永八年（一七八九）に板行となっている。一説では一周忌に弟子の貫四が編集した「雪を花」という俳諧集があると云われ、この二つの表題のものが同一のものか疑問視されるところである。（鈴木）

東西南北

◎県立図書館の年末・年始の休館日
12月26日(月)～1月5日(木)まで

◎県立図書館特別休館

図書及び機材・器具整理のため次の期間内は、閲覧・貸出し業務を休止いたしますので、お知らせします。

○県立川越・久喜図書館

昭・59年2月22日(木)～3月2日(金)

○県立浦和・熊谷図書館

昭・59年3月7日(木)～3月16日(金)
ただし、移動奉仕、一般事務は平常どおり行っています。なお、休館日の図書返却は、入口にあるブックポストを御利用ください。

12-2月の主な催し物

■県立浦和図書館

○冬休み親子映画会

日時 12月24日(土)14時

内容 「走れ、ぼくの小さな友だち」

日時 1月6日(金)10時/14時

内容 「こむぎいろの天使」

○土曜名作映画会

日時 1月14日(土)10時/14時

内容 「泥の河」

○レコードコンサート

日時 1月28日(土)13時30分/16時

内容 「津軽三味線の魅力を追って」

■県立熊谷図書館

○名作映画鑑賞会

日時 1月7日(土)10時/14時

内容 「三大喜劇王」チャップリン、キートン・ロイド
「チャップリンのゴルフ狂時代」

日時 2月4日(土)10時/14時

内容 「泥の河」

○こども映画会

日時 3月3日(土)10時/14時

内容 アニメ特集、「ゆかいなリトルボーイ」、「アニメイム」ほか

○ビデオコンサート

日時 1月28日(土)14時

内容 「アゲイン・ザ・モダンジャズカルテット」・MJQ

日時 2月25日(土)14時

内容 「矢沢永吉/ラン&ラン」

■県立川越図書館

○児童文化講座

日時 1月10日(火)13時30分

内容 「友だち100人できるかな」

演題 「昔の世界―いまなぜ昔話なのか」

講師 小沢 俊夫氏

○冬休み親子映画会

日時 12月24日(土)10時/14時

内容 「走れ、ぼくの小さな友だち」

日時 1月6日(金)10時/14時

内容 「クレオ物語」、「幽霊屋敷」、「金の斧、銀の斧」

○名作映画会

日時 1月7日(土)10時/14時

内容 「あゝ野麦峠」

○郷土を知る映画会

日時 1月26日(木)14時

内容 「埼玉の民俗、正・続」ほか
※ いずれも先着150人

■県立久喜図書館

○名画鑑賞会

日時 12月24日(土)10時/13時30分

内容 「おれたちの交響楽」

日時 1月7日(土)10時/13時30分

内容 「車輪の歩―男たちの旅路」シリーズ

日時 2月18日(土)10時/13時30分

内容 「聖職の碑」

○映画会―福祉映画会シリーズ

日時 1月12日(木)13時30分

内容 「友だち100人できるかな」

詳細につきましては、次の各館視聴覚課にお問い合わせください。

県立浦和図書館 〇四六二―二六三
県立熊谷図書館 〇四六五―三三三
県立川越図書館 〇四六二―四三三
県立久喜図書館 〇四六二―二六五

読書グループの紹介

こどもの本研究会

この会は、子どもの本を楽しむ会で、子どもの本が好きな人なら誰でも参加できます。

昭和五十五年、蓮田市図書館の企画で発足し、毎月、第二水曜の九時三十分から十一時三十分まで、中央公民館の一室で行われています。

参加者は、現在、蓮田市内の有志十二名で、毎月の課題書を必ず読んでくることが条件です。この本は、蓮田市図書館が、県立図書館の協力で用意しています。

こどもの本研究会は、まず、レポーターが、作品のあらすじ、著者の略歴、文学史的な位置などをのべたのち、各自が、その作品をめぐって自由に話題を展開していきます。

ウィリアム・メイソンの「砂」(口の中が砂でざらざらした)からスタートし、サトクリフの「太陽の戦士」(少年のような声で、面白かったと叫んだ)、キャロルの「ふしぎな国のアリス」(はじめてのアリス体験)、アーサー・ランサム「ツバ



食べものと健康 —資料展から—

私たちが健康で文化的な社会生活をおくる上で、身体形成のもとになる「食物」に依存する場合は日常的にきわめて大きなものがあります。

ここ十数年の間にわが国の食生活の内容は大きく変わってきました。その背後には、食物そのものの変化と種類と量の多さと、それを支える食品産業及び流通の目ざましい発達とがあります。

また、一方では、都市化・工業化が広がるにつれ、農業生産における商品化が進み、環境汚染・食品公害など新たな問題が食生活に影響を及ぼすようになってきました。

そこで私たちは、あらためてもう一度、自分たちの健康とは何か、いのちと暮らしを支える食生活はどうあるべきかを素材に学ぶことから出発する必要があると思われれます。

「食糧の問題」

世界の食糧問題と日本農業 食糧の

メ号とアマゾン号」(なぜか、ぶ厚くて灰色の表紙なのだ)、ル・グイの「ゲド戦記」(ゲドに追われて不眠症になる)などを読みつぎ、今年の九月から三ヶ月かけて、トールキンの「指輪物語・全六巻」(中つ国の夢いまださめやらず)を読破しました。

こんなに面白い子どもの本を、子どもに独占させてなるものか、というのが、全員の一致した意見ですが、やはり子どもに読ませたいのは当然です。面白かったという感動を、身近な子どもたちに、それぞれが伝えていくのが、子どもの本を読んでいる大人の役目であると思っています。このようにして、こどもの本研究会は、同じような仲間を得、子どもの本の世界を、ゆつくり旅していきます。



—研究会—

「かたつむり文庫」

蓮田市黒浜の一角にあった田畑や沼地が椿山住宅地に変身し、はじめて人が入居したのは九年前になりました。現在では、千戸以上の家々が建ち並んでいるのですが、私たちのかたつむり文庫が誕生した当時は、二百戸ぐらゐの家が広い住宅地に点々と建てられている時期でした。

今から六年前になります。当時まだ家の建っていない空地は、子どもたちの広い遊び場でした。しかし、蓮田市の中央公民館図書室や、県立浦和移動図書館の「むさしの号」の巡回駐車場は、私たちの住宅地から遠い所だったので、そんな中で子どもたちに読書の環境を作ろうと考えていた母親が集まりました。ななとか椿山住宅地に文庫が欲しいと思ったのです。幸いなことに住宅地内に自治会館が建設された直後でした。自治会の御協力により、この会館に文庫を設置することができたのです。立派なガラス戸付きの書棚も購入していただきました。これに持ちよりの図書、浦和図書館、東京おはなしキャラバンの図書、約三百五十冊が並んだ時のうれしさは、大変なものでした。私たちは開庫までに



ある日の文庫

あちらこちら足を運び、何回もの話し合いを重ねましたが、それでもラッキーに準備が進んだと思っています。

今、文庫は毎週日曜日十時から十二時まで、二十名の母親の交替の世話で開かれています。毎月一回お話し会を開いていますが、子どもたちが楽しみにしてくれています。また、年一回、地域の夏祭りには、絵本のお話しを人形劇にして上演しています。この行事は地域にすっかりなじみのものとなりました。蔵書数も現在では、寄贈、購入とで二千冊に増え、この他に団体貸出しで借りた図書が四百冊あります。

子どもたちによい本を読んでもらうためにも親たちの勉強が必要だなどしみじみ思っている此頃です。

安全保障は万全か 唯是康彦、斎藤優編 有斐閣 昭56 (有斐閣選書) 都市の食糧問題 日本科学者会議編 大月書店 昭58 二十一世紀の食糧・農業 奥野忠一編 東京大学出版会 昭58 (UP選書) ジュリスト 増刊総合特集 No. 28 日本の食糧 風土・農政・食文化 有斐閣 昭57 いまこめが危ない 石原健二著 柏書房 昭58 米 飽食への警告 吉田徳寿著 時事通信社 昭58 外食産業の現状と展望 変わりゆく食生活とその対応 外食産業問題研究会編 地球社 昭56 食のマーケティング 変わる消費者嗜好 山口貴久男著 日本経済新聞社 昭57 (日経流通ブックス) 野菜の流通と値段のしくみ 山口照雄著 農山漁村文化協会 昭57

「食品の加工と商品化にひそむもの」 あなたの体を蝕むインスタント食品の秘密 郡司篤孝著 文理書院 昭57 食品・薬品公害 消費者主権確立への闘いのすゝめ 高橋暁正(ほか) 洗著 有斐閣 和48 (有斐閣選書) 昭見えざる恐怖・食品汚染 わが子、



わが身をどう守るか 武者宗一郎著 講談社 昭56 食品添加物便覧 昭57年版 食品と科学社 昭57 洗剤とまれ 草の根研究二十年 柳沢文正編著 続文堂出版 昭57 日本洗剤公害レポート 決定版 日本地域社会研究所編 現代ジャーナリズム出版会 昭57

知ってまずか水道の水は飲んではいけない この危機から自分を守りか 暮しを守る調査部編 青春出版社 昭56 (ブレイブブックス) 水と生命 ―その生理と生活科学― 森下敬一著 美土里書房 昭56 (森下敬一選集2) 「健康法」 食品成分表 四訂日本食品標準成分表による 科学技術庁資源調査会編 女子栄養大学出版部 昭58 生活の中の栄養学 健康に生きる食

の知恵、豊川裕之著 大修館書店 昭57 (PH選書) 肝臓に効く驚異のシジミ健康法 甲斐良一著 講談社 昭57 「健康法」 恐い常識のウソ 自分の体を自分でつくる方法 高須克弥著 青春出版社 昭58 (Play Books) 康法24の知恵 新田豊造著 潮文社 昭50 塩の健康法 成人病を防ぐ 笠原寿子著 潮文社 昭58 (潮文社リウ) 生ジューズ健康法 小谷英三著 有紀書房 昭57 になく健康法 体験と料理 主婦の友社編 主婦の友社 昭58 ハトムギ健康法 体型・体質・症状別 荏淑旅編著 主婦の友社 昭57 健康食

豆乳はこんなに効く 一億人のスーパー飲料 主婦の友社編 主婦の友社 昭58 健康言ひ伝え雑学事典 原勝文著 東洋医学舎 昭58 健康を食べよう 青葉の本 酒見フジコ、日野厚著 文化出版局 昭58 健康食百科 若さと美しさをつくる主婦の友社 昭58 台所なるほど科学事典 知らないとな変ノ食生活の常識・非常識 河野友美著 PHP研究所 昭57

野菜は薬だ 岩尾裕之・小林正夫共著 農山漁村文化協会 昭和57 (健康双書)

胃腸病を食事で治す 治療のポイントと日常生活の心得 四季の献立付 渡辺哲弥著 ナツメ社 昭和58

肝臓病の療法と食事 大久保忠成 (ほか) 著 日本文芸社 昭和58

朝日ブックレット No.11 がんとう食品 朝日新聞社 昭和58

高血圧を食事で治す 減塩食のポイントと日常生活の心得 四季の献立付き 近藤敏著 ナツメ社 昭和58 (ナツメブックス)

こんな病気は穀菜食で治せる 白米

肉食が日本人の体をダメにした 森下敬一著 大和書房 昭和58 (健康シリーズ)

心臓病を食事で治す 治療のポイントと日常生活の心得 四季の献立付き 里見裕著 ナツメ社 昭和58 (ナツメブックス)

腎臓病を食事で治す 治療のポイントと日常生活の心得 四季の献立付き 田原達雄著 ナツメ社 昭和58 (ナツメブックス)

新病気と食事の事典 平田清文 (ほか) 編集 医歯薬出版 昭和58

糖尿病の食事療法 診断と治療 中原健次郎監修 新星出版社 昭和58

老化は食べ物が原因だった ノーベル医学生理学賞からの大発見 ベンジャミンS・フラング著 青春出版社 昭和58

〈自然食〉 おいしく食べて美しくやせる菜食のすすめ 林高春監修 実業之日本社 昭和58 (実月新書)

驚異の自然食 森下敬一著 ダイナミックセラーズ 昭和58

玄米正食料理法 山口久子著 新泉社 昭和58

自然食健康法 ガンから高血圧まで 森下敬一著 潮文社 昭和57 (潮文社リブ健康法シリーズ)

自然食の健康法 ―食物による自然療法・体質改善法― 青木春三著 文理書院 昭和58

編集後記

昭和五十八年も師走、(川口市には十二月田の地名があった) 俗学によると先生が急しく走り廻る月とか。県立四館共同事業による。だより十八号は、予定どおり読者の皆様へ、お届けできることになった。偏差値教育の軌道修正が叫ばれているとき、川越図書館長さんの体験による玉稿をいただき、紙面を飾ることができた。やがて、ゆく年くる年、世界情勢は相変らず渾沌としており、来年こそはよい年であるよう誰しも、祈らずにはいられない。

おたすねくたさい

門松の由来

問 正月に家の門口に立てる門松の由来は？
答 神に青木の枝をささげるのは日本古来の考え方で、門松はここに歳神を迎えて祭るのが本来の意味であつたと考えられますが、その由来にはいろいろの説があります。宮中では昔は門松を立てなかつたので、小家が汚れを隠すために立てたのだらうとか、昔、内裏の門前に鈴を立てたのが変化したという説。素盞鳴尊(すさのおのみこと)



が巨匠将来(こたんしょうらい)を殺した時、墓標を立てたのが始まりという説、また、中国唐代の風俗が輸入されたという説などです。門松がいつ頃から行われるようになったか明らかではありません。

せんが、使われる枝は松に限らなかつたようです。現在でも、地方によって、檜、樺、朴、栗、榊等、各種の常緑樹が用いられています。『土佐日記』に都の正月を思つて、「小家の門の端出之繩(しりくべなわ)の端(なよし)の頭、柵ら、いかにぞ」という部分があり、当時では家々の門口に柵を立て、しめ縄を張ったことがわかりますが、これは今日の節分と似ています。また、『徒然草』には、「大路のさま、松立てわたして」とあり、平安

資料 「日本年中行事辞典」 鈴木業三著 角川書店 「年中行事辞典」 西角井正慶編 東京堂 「大日本百科事典」 ジャポニカ 小学館 ほか

末期には松を使うことが一般化したようです。しかし、地方では門松をたてない村や特別な家などが残っていて、これらの習慣の方がその地方の前代の風習を示し、門松は新しい流行であると考えられています。